



運河にかかる跳ね橋

特別にオランダに行きたかったわけではない。福岡からの直行便が就航したからだ。しかし、今は乗り継ぎで多少不便であつてもオランダは一度は訪れる価値があると思うようになつた。

それは娘のお陰かもしれない。オランダに行くことを決める時、娘は司馬遼太郎の「オランダ紀行」と「週刊・街道をゆく」シリーズ三冊を送ってくれた。さらに司馬のオランダ紀行にもとづくNHKスペシャル「オランダ紀行」のスタッフがまとめた「司馬遼太郎の風景」も送ってくれた。

特に「司馬遼太郎の風景」は実にわかり易く、興味深い。これからオランダを旅する人にはこの本を読むことをお勧めしたい。よく言われるところだが、旅は事前・旅・事後が三位一体となつて豊かになると改めて痛感する。

さて、オランダは十六世紀までカトリックのスペイン統治下にあつたが、一五八八年に独立戦争を起こし、八十年後の一六四八年に独立を勝ち取る。その後、南部のカトリックが強い地方はベルギー、ルクセンブルクとして独立する。

従つて、オランダはカトリック信者もかなりいるが、色分けする時はプロテスタントの国とされる。そのため、江戸時代の鎖国体制下でオランダとは交易があつたのだ。

司馬遼太郎はオランダを「市民国家」と表現しているが、スペインと戦つて独立を勝ち取り、市民自らの手で堤防を築き、干拓事業によって国土を造り出した。そんな成り立ちからも市民国家と

縱横に造られた運河を船が通る。オランダではすべての通行で船の運行が優先され、縦横に造られた運河を船が通る。

従つて、オランダはカトリック信者もかなりいるが、色分けする時はプロテスタントの国とされる。そのため、江戸時代の鎖国体制下でオランダとは交易があつたのだ。

司馬遼太郎はオランダを「市民国家」と表現しているが、スペインと戦つて独立を勝ち取り、市民自らの手で堤防を築き、干拓事業によって国土を造り出した。そんな成り立ちからも市民国家と

船が通るため跳ね橋があげられる。オランダでは船の状態になるまでじつと待つていて、

船が通るため跳ね橋があげられる。オランダでは船の状態になるまでじつと待つていて、

日本と比較しながら眺めればならない。

私はオランダの風景を日本と比較しながら眺めればならない。

花天国は自転車天国でもある。

オランダの成り立ち  
オランダ紀行③

サビエル生誕五百年  
巡礼の道  
藤屋侃士  
(下松市幸ヶ丘)  
447



花天国は自転車天国でもある。